

# 最古経のカーマを解明し無常無我空ではなく 抜矢と共苦による平安説法を確定する

## 解題

「武器を手にする経と死後を憂う経の比較により釈尊の原体験を特定する<sup>(1)</sup>」に於いて、釈尊の苦と解決を示した。すなわち、

**釈尊の苦しみは、自分が闘争することであり、同時に人々が闘争することである。また、その苦の原因は見えない矢であり、見えない矢とは、ナーマルーパの私物化による奪い合いと、諸物を渴愛がカーマとして妄想することであり、それを解消することで、即座に一切所に平等平安を得る（スッタニパータ4章⑮経）。**

しかるに、今日の仏教は四門出遊による生老病死を苦と考え、その解決は三法印つまり一切皆苦や縁起や空や無我を理解徹底することだとされるのはなぜか。

たとえば、

第二古層、Sn 第五章には、「**肉体（色）を有する者は殺害などの苦が有るから肉体を消滅させ、二度と生誕するな**」と説き、「**何も無いと見る**」観法が説かれる。

第三古層、SN1-2-10 には、「**名指しされたものには、そのものは無いと見よ**」<sup>(4)</sup>

SN2-10 には、「**五蘊は私ではないと見て渴愛を離れよ**」と説き、<sup>(5)</sup>

第四古層、SN4-3-3「**覚ったとされるゴードイカが死のうとしている**」と聞いて、

**「思慮あるものは生命を延ばすことを期待しない。彼は渴愛を根こそぎ引き抜き、完全に涅槃した<sup>(6)</sup>」**と語り、この世での生存を否定する。

最古の経Sn4 ⑮の釈尊は、生きること自体が苦であるとは説いていないのであり、その苦は限定的でぶつかり合い奪い合い殺し合うことが苦であるとする。

それゆえに、無我・無常・縁起・空を知ることによってその闘争苦が解決されるのではなく、渴愛を制することでカーマの構想が消滅し、名称や色形を独占する行為や思いを停止することで、ぶつかり合いがなくなると示す。

(1)（善通寺教学振興会紀要 21 号）

(2) Sn の第四章が最古であり、続いて第五章→SN 有偈章の神々の章→悪魔の章の順であることが、中村元、荒牧典俊によって論証されている。

(3) 一切皆苦への踏み出しである。その端緒は前掲論文で示したように Sn4 ②経にある。

(4) 注 46

(5) この場合の渴愛は、カーマ愛というより再誕生の素因となる有愛・無有愛。

(6) SN5-8 一切の業の破壊を達成し生存の素因を滅ぼし解脱している。SN5-6 この世は苦、再誕生するな、生を超える、消滅を知らず再誕生する。SN8-2 死の時の至るのを待つ。

では、なぜ釈尊以後に、一切皆苦や無我が説かれるようになったのか。その展開の連続性が認められるならば、その根源としての釈尊の闘争苦と一切所平等平安の境地はその基盤を確固たるものとするであろう。

## (一)、初期の釈尊の教説を特定する

### (1)、Sn4 ⑮経「カーマの構想」と「名色の私物化」

Sn4- ⑮経の後半で、見えない矢とその解決は次の様に説かれる。

㊦渴愛 (jappa) によってカーマ (kāma) が構想 (pakappa 妄想) される (945 偈)

㊧苦の解決策は、過去・現在・未来のカーマの消滅である (949)

㊨名 (ナーマ) 色 (ルーパ) を私物化 (nāmarūpasmim mamāyitam) しない (951)

㊩「これは私のもの」「これは他人のもの」と見做すことがない (952)

㊪彼喪失を悲しまず、(老いることなく)、(所有をめぐって) 敵対して冷酷になることもなく、取り込んで我が物にしようと貪欲になることもなく、敵とか味方とかと動揺することなく (奪い合う苦がなく)、あらゆるものに対して、平らか (sama) である (一切所平等平安)。彼は「同等が良い、下が良い、上が良い」と説くことがなく、平安であり、自己肥大を離れ、奪うことなく捨てることがない (954)

### (2)、Sn4 章⑮経の説を⑩経で補足

次に⑮経の次に書かれたと思われる⑩経によって⑮経の釈尊の教えを補足する<sup>(8)</sup>。

**1.説法自在であり、衆生の種々の苦に対して共苦 (共感) があった。**

853 偈「快適な方向へと流されず、自分が優れているとかいうことに無頓着で、柔和でこだわりがなく説法が自由自在である。そしてだれかれに染まることもなく、無関与というわけでもない」

また、第三古層であるが、

SN1-3-4 には、「思考分別の全てを遮断すべきではない。自制された心は抑制すべきではない。悪の生じるその時その時に、適時制御すべきである」として適時に分別すべきことが書かれ、

(7) mamāyite passatha phandamāne ⑮経に関連が深い②経には明確に奪い合う苦が示される

(8) 拙著「最古層の經典の変遷、スッタニパータからサムユッタニカーヤへ」に詳説。

SN4-2-4 には「人の為を思い共苦する<sup>(9)</sup>から説法する。それによって心が同化した<sup>(10)</sup>り反駁して揺らぐということから解放されているから」と説かれる。

## 2.奪い合う苦を離れている

857 偈「私はこのような人を「完全な静寂平安を得る者である」と言う。彼は欲望物（カーマ）へと求めて行くことなく、彼を（苦しみの）生起へと結びつけるものどもはなく、彼はもろもろの結びつけられたものを渡っている。

858 偈「彼に、子や家畜や田畑や土地はない。彼には得たものも捨てたものもない」

860 偈「肥え太ろうと思わず、独り占めするということがなく、もっと多くとか、同じぐらいとか、もっと少なくということがなく、分別しないのだからカーマを妄想して構想することがない」

## 3.何かに頼ることがなく完全な静寂平安を得る者である。自己肥大の欲求がなく、自我（自己の領域）あるいは自分の所有物の増減に無頓着である

856 偈「何ものにも頼らず（自立する<sup>(11)</sup>）者はダルマ（諸物が何であるか）を知って寄り掛からない者となる。彼には有と無（ダルマの）への渴望が見出せない」

## 4.この世において既に渴愛を解決して、離欲故に感受や思考見解に右往左往することがない

849 偈「死を迎える以前に渴愛を離れ、過去の極限まで寄り掛かることなく、現前においてなされるべきものを持たない人。彼には目の前に何かをつくるということ（将来への期待）がない」

851 偈「未だ来ない事にしがみつかず過ぎ去ったものを悲しまない。感触し体験するする事柄を見るその眼はその事柄から独立していて汚されない。それを見て起こる見解はあらぬところへと引き連れられていくことがない」

860 偈「肥え太ろうと思わず、独り占めするということがなく、もっと多くとか、同じぐらいとか、もっと少なくということがなく、構想しないのだからカーマを妄想して構想することがない」

以上から釈尊は、

**渴愛を解決することでカーマをつくることなく、行為において所得を制限して**

(9) Hitānukampī sambuddho yadaññāmanusāsati. Anurodhavirodhehi, vippamutto tathāgato”ti.

(10) テーラー-偈などに多くの被差別民などの苦難に生きる人々が釈尊に簡単に入団を認められることが書かれていることから、釈尊は修行僧や苦難の人々に対して説法自在であった。しかしその後「想と見解を持つものはぶつかり合いつつこの世をうろつく（Sn4 ⑨経）」のように、論争を極度に嫌うが、それは釈尊滅後に教団の危機があったと推測する。

(11) Sn4 ⑩洪水偈 946 に「真実から逸脱しない聖者は、バラモンであり、（洪水の中で）陸地に立っている。彼は、全てを捨てていて、彼こそ、平安なるもの（平和）と言われる」

カーマを奪い合うことがなく、経験的感受や思考においても構想してカーマをつくらず、論争や対立することがない。その上で、自我や所得の増減の欲から解放されて適時に分別して説法するのである

と考えられる。

この⑩経が特殊でないことが、次の Sn4 ⑥経④経などから証明される。

812 偈「蓮の葉の上の水滴や蓮華上の水が汚れないように、ムニは見聞思考において汚れない」

795 偈「バラモンは境界を超えて行き境界を持たない。彼は観る。彼は知る。

しかしそのものを取り上げて握り締めることがない。彼は欲に染まる世界に染まらず、欲に染まらない世界にも染まらない。彼には取り上げて「超える何か(最高)」とするものがない」

### (3)、Sn4 ⑮経⑩経から考えられる釈尊の教説の特徴

以上から釈尊とその直後の教説を、次の様に定めたい。

基本的には、自己の闘争と衆生の闘争を苦と受け止め、その原因である見えない矢を抜くことで苦を除く。

㊦ 渴愛がカーマを構想し、そのカーマの泥沼に生きるのが苦である。

苦の解消は、渴愛を消滅しカーマを構想しないことである (949)。

㊧ 私的所有を制限し、奪い合う苦を逃れていて、一切所平等平安である。

㊨ ダルマ(存在物)を「私のもの」「他人のもの」と見做すことがない (952)

㊩ ダルマ(存在物)を見る、知るが、それに染まらず染まらないでもない<sup>(12)</sup>。

㊪ 共苦により(闘争苦を共感共苦するから)<sup>(13)</sup>、適時分別し、説法自在である。

㊫ 特定の見解を持たず、より良いとか悪いとか同等というようにダルマに赴かず、<sup>(14)</sup>  
論争しない<sup>(15)</sup>。

## (二)、カーマ・私物化・五蘊の関係

(12) 八不中道を想起させる

(13) Sn4 ⑮経には共苦の語はないが、釈尊は恐れて武器を使用せず、その後、人々の闘争を見てなんともしがたい気持ちになったことを表現している

(14) Sn837 偈「私はこれを説く」という諸ダルマを選びとって決定し固執することがない。

(15) Sn847 偈「想を離れた人には彼を縛るものはない。般若智慧によって解き放たれたものには意識の低下 moha がない。既成観念 sañña と見方 diṭṭhi にしがみついた人は、あれこれにぶつかりながらこの世を遍歴する。

# (1)、カーマとは何か

「武器を手にする経と死後を憂う経の比較により釈尊の原体験を特定する」で明確にしたように、釈尊の肉声が Sn4 ⑮経の冒頭5偈に伝えられ、苦の解決は「見えない矢を抜くこと」であると明言される。そして⑮経の後半で「見えない矢を抜くこと」は次の㊦㊧の二つに分析されていく。その展開が釈尊のものなのか舍利子など愛弟子によるものかは不明であるが、この二つはその後各所に登場して、後の仏教教理の成立に重要な役割を持ったと思われる。

## ㊦カーマの解消

### ㊧ナーマとルーパの私物化の停止

まず、カーマという用語を明確にしたい。

例えとして、英語の「love」は、動詞としては「愛する」であるが、名詞としては「愛人」つまり「私が愛しているそのもの」である。カーマは (kāma) も動詞は「欲しがる」であるが、名詞は「欲望」という意味と「欲しいと想ったもの」<sup>(17)</sup>「欲望の対象」の意味がある。

Sn4- ⑮	欲望が構想したものがカーマである (945 洪水偈)
Sn4- ①	田畑、宅地、黄金、牛馬、奴婢、傭人、婦女、親族その他いろいろの欲望物 (カーマ) を人が貪欲すると・・・
SN 1-4-4	カーマとは種々雑多な物 (チトラ二) ではなく、渴愛が作り上げた虚像である。上記 Sn4 ⑮洪水偈と同様にラーガ (欲愛) がサンカッパ (構想、Sn4 ⑮ではパカッパ) して出来たのがカーマである。 Na te kāmā yāni citrāni loke, Saṅkapparāgo purisassa kāmo
SN 1-2-10	言葉で指示されたもの、それ自体は存在しない Akkheyyaṅca pariññāya, akkhātaraṃ na maññati
SN5-10	五蘊があるところに仮の名として有情がある。ただ苦しみが起こるだけである

㊦ Sn4- ①では、カーマとは、宝石などの物自体を指している。自分の心の中にある宝石や奴に思い焦がれるのをやめよというだけでなく、実際に宝石や奴婢を放棄せよという。おそらく、Sn4 ①経では、境とイメージされた境とは分離していない。例えば、人が居て、その人を私が愛すれば愛人となる。実際に存在するのは、(大きな分子レベルでいえば) 塊の人間と、私の脳内に構成される愛人の

(16) ㊦㊧が釈尊自身の説を疑う根拠としてはナサッド 神話やカニャット のカーマ説、所有説への傾斜が見られるからである

(17) 想は「カーマの構想」を意味するサンニャー saññā の訳語であるが「考える、思い出す、したいと思う」の意味がある。想の字形は相と心で構成され心の上に相が在る。外界あるいは他者あるいは何かに触れてそれを心に持つことである。心に懐く、認める←見て留める、に通ず。經典では grah 手にする、握るとして多々記される。できごとの印象を保持し繰り返し繰り返しの特徴と出会い自分からそれへと向かうことが想でありサンニャーである。

(18) SN1-4-4 向うに何かを認める。唯識三十頌でも、相の向うに何かが無いとは言っていない。向うに何かがあると指定する限り識に留まっていない (唯識でない) と言っている。

イメージあるいは身体感覚である。その人は、私にとってのみ愛人であるのであって、他の動物から見れば人間でさえも無いであろう。私が夢の中でいくら愛人を独占しようと他者との闘争は起こらない。しかし、その人を独占すると闘争が起こる。ところが、

㊦ SN1-4-4 では、カーマとは、奪う対象ではなく、それに接して渴愛が想像し創造した、私にとっての私だけの特別な欲望の権化なのである。

SN1-4-4「世間の雑多なもの(チラーニ)がカーマではなく、人が渴愛(chanda)によって構想(サカッパ)<sup>(19)</sup>した貪欲がカーマである。チラーニはそれにかかわらず存在する (Saṅkapparāgo purisassa kāmo, Tiṭṭhanti citrāni tatheva loke)」

SN1-4-4 は、Sn4 ㊦経の「渴愛が構想してカーマができる」を継承する。

宝石などの物自体はチラーニ<sup>(20)</sup>と表現され、その存在が否定されているわけではない。その物自体、あるいは、かたまりは、SN5-10 では「清浄な集積せられたあつまりである (Suddhasaṅkhāra-puñjoyaṃ)」とされる。縁起と合わせて考察すると、存在物(dharma)とは語源が「まとまる」「何らかの求心力やルールでひとかたまりとなる」という意味であるが、諸物は分解していくと小さな断片や粒子となって原型を失う。その清浄＝無味乾燥なものが集積して何らかのルールをもって機能するとき人や動物やコップとなって、ダルマとして捉えられると考えたのではないか。だから渴愛が消滅するとき、諸物は平坦で無味乾燥で清浄無垢であり、空<sup>(21)</sup>なのである。その粉にもなり人間ともなるものをチラーニ(雑多なもの)と SN1-4-4 は命名し、渴愛によって愛されたものをカーマと呼ぶ。

㊦は、奪い合う対象を言い、㊦は、心に描かれた想像されたものを言う。SN1-4-4 の用語で言うと、㊦はチラーニであり、㊦はカーマである。ただし Sn 4 では㊦と㊦は分離せず、Sn4 でいうカーマとは㊦と㊦の両方を指すと思われる。

なぜなら、カーマが心に描くものだけを指すのなら、宝石や婦人の争奪による闘(19) 直訳は「カーマとは構想する欲望である」となるが、その意味するところは、カーマとは、「次々と構想(妄想)を生み出す欲情である」ということか。用語からすると、Sn4 ㊦経と類似していて、人間の欲情が構想して作り上げたものと考えたい。あるいは、前出の chanda が Saṅkappa の主語で、カーマとは vinaya されない chanda が、あれこれと構想して出来たラガであるか解釈するか。

(20) 参考、SN5-9 縁起、5-10 無我(ただし中村先生は無我ではないとする)。

十二因縁経(相応部- 12 因縁相応- 第 20 経「縁」(paccaya))には「生があって老死がある。如来の出現に係わらず、ダートゥは存在する」

(21) 空と表現したが、空の思想には諸存在がアナーキーに空なのではなく、ブラフマンや世界創造の始源としてのサット有からの意欲による展開を想起させる。神の意志によってつぐられ、神の意志によって無とも有ともなり、種々雑多のものへと権化するのである。その神の視座を得ることが解脱であるとの含みが在るのではないか。それに対して冒頭 5 偈の釈尊は経験される苦を第一義の問題に置いて、神話の隙入の間隙を与えない。

争は起こらないからである。であるから、

カーマとは、 ㉗奪い合う対象

①渴愛が構想したもの（幻影・虚像）

この二つの意味がある。重要なことは、

カーマは、渴愛が有るときに必ず生じる、渴愛が無いときには存在しない。

（渴愛 = a、構想 = b、カーマ = c）ならば  $(c = a * b)$  である。

以下明らかになるように、カーマがないからといって渴愛がないわけではない。<sup>(22)</sup>

## (2)、カーマとナーマ・ルーパの私物化の異同

次に最古の経<sup>15</sup>経が説く「ナーマとルーパ°のマーイタム」を明らかにしたい。ナーマとは名前であり、ルーパとは色形である。時としてナーマルーパは個体存在を表すとされるが、ここでは名前あるものや形あるものの意味であろう。

「カーマを捨てる」と「ナーマルーパの私物化（ママーイタム）をやめる」<sup>(23)</sup>は同義なのか。

814 偈「その人の名前（nāma）が呼ばれ、姿が見られ声が聞かれた人。その人が死んで名前だけが残り語られる」

809 偈「種々のものを私物化しようと（mamāyite）貪欲な人は、手に入れられないと悲しみ、失うことを憂い、手に入れるともっと欲しくなる。故に聖者は所有物（pariggaham）を捨てて修行したのだ。（無所有の）平安をこそ見つつ」

この Sn4 ⑥経は Sn4 ⑮経の直後に成立した経であると思われるが、814 偈から、ナーマとは一人一人の生命体を指すのではなく、素朴に名前を指していると思われる。また、809 偈からは、ママーイタムとは、所有（pariggaham）の意味であり、財宝などを所持することである。

理屈からいえば次のように考えられる。

チトラーニと接触して渴愛がカーマを構想して、そのカーマを私物化する

その構想とは観念的な私物化であり、カーマの私物化とは他者（チトラーニ）の私物化である。そして Sn4 ⑥経の、

---

(22)  $(c = a * b) \rightarrow (0 = a * 0)$ 、 $a \geq 0$ 。唯識三十頌に「現前立少物」しないなら唯識であると記す。渴愛があってもカーマの向うのチトラーニを創造し想像しないなら、カーマは無い。余談ではあるが、私達は食事するときに「これは私のものだ」と思うわけではなく、無意識に口に入れることがある。このとき、㉗奪い合う対象を私物化するが、④心に描く対象は私物化していないといえるのか。食物を食物として認識したから食べるのだから、認識した瞬間に④の私物化が起こっていたというべきか。それは色なのか想なのか。

(23) 中村元先生は「名称と形態についてわがものという思いの全く存在しない人」と訳す。

950 偈「名前のあるもの(名付けられたもの)形態のあるもの(把握されたもの)において、私物化されたものがない人は、何かがなくなったからといって悲しむことはない。(だから)彼はこの世にいて不失、不敗である」

ここでは、名前あるものや形あるものを自分のものにすることを語っている。ところが、

951 偈「「これは私のものである」とか「これは他人のものである」という思いが少しもないならば、彼には、「私のものだ」という思いがないのであり、「私にはない」といって悲しむことがない」

ここでは、所有そのものではなくて、自分の領域にあると思うことを言っている。例にとると、愛人は、愛人である前に人であるが、自分の領域にあるとき愛人になるといえる。(ただの)人を(特別な)愛人に見做すのである。この見做すことが「構想(パカツパ pakappa<sup>(24)</sup>)」である。

以上のようにナーマとルーパの私物化とは、次の二つの意味がある。

㊦実際に諸物を手に入れること。

㊧そのものを自分のものと思うこと。

そして、この二つはカーマの二つの意味と同じであろうか。

872 偈「ナーマとルーパが因となって接触(体験)がある。欲求(icchā)を基盤として所有が起る」

この文章からは、私物化(ママーイタム)とはチトラーニの所有支配である。一方、SN1-3-3「ナーマとルーパが残りなく消滅し、対象がなくなりルーパを心に描くこと(想 sannā)も消滅して、外にも内にも結縛がなくなる」

ここでは、私物化とは、対象化とそれを心に描き焦がれることをいう。

しかし私が疑問に思うのは、「愛人」という名前を所有することとはどういう意味か。愛人という愛された物を思い浮かべるといふことか、あるいは自分にとって愛人として認知することなのか。愛人を理解するのはナーマであり、人を愛人として認知するのは、ナーマのママーイタムであろう。

そうすると、ナーマのママーイタム<sup>(25)</sup>とは、「あるもの」を「何々である」と見做すことに他ならない。ルーパも同様に考えると、ルーパのママーイタムとは、「感知したもの」を「この形」と特定することなのである。

(24) parikalpa 唯識、遍計所執、vikalpa 分別

(25) 中村元・原始仏教の思想 I p481「最初期の仏教では、名称とは精神的な表象内容、形態とは身体のことであると考えていたらしい」



こうして、

**ナーマの私物化とは、**      ㊦名前を持つものを所有すること  
   ㊧あるものを何々であると思ふこと

**ルーパの私物化とは、**      ㊦形あるものを所有すること  
   ㊧あるものを特定の形として把握すること

である。

ルーパの私物化の㊧は、何かを、それであると抽出して特定することである。<sup>(26)</sup>これが五蘊の色か。また、ナーマの私物化の㊧とは、抽出されたものが「何であり」「快不快か」「好か嫌か」「誘惑か害悪か」をその色に付与することか。総じては想であろうが、感受（受）、私にとってもの功罪（想）、形成作用（行）、それに対するものとしての自覚あるいはそれが何々であるという分別（識）、であろうか。そうならば、

**ナーマとルーパの私物化とは、**

**チトラニや名前（社会的所有＝名声・地位・権利など）の所有であり、  
色＝何かがあると姿を認め、受＝感受し、想＝好悪など構想し、  
行＝行為工作し、識＝自他の存在を確定することである**

そのことを次に見ていきたい。

### (3)、五蘊とはカーマの別名か

ここまでの議論で、渴愛・構想・想・カーマ・ルーパ（色）・ナーマ・私物化（マ・イタム）などの用語が揃ってきたのだが、上記のようにカーマとは欲望が構想した存在者であるとする、それを愛人に譬えると、愛人とは「（色 rūpa = 色や形として）そのものが図柄として抽出され」「（受 vedanā = 感触として）好ましくて」「（想 saññā = 好悪として）繰り返し色や受を反芻し」「（行 saṃskāra = 形成力として）会いたくさせて」「（識 viññā として）いろいろと想像させる私を措定する」ものであるならば、カーマと五蘊とは同じ内容ではないのか。

Sn 第五章には、「識が消滅し色が消滅し苦が消滅」と説かれるから、五蘊の一つである色とは、先のチトラニではなく、心に描いたカーマ<sup>(28)</sup>である。しかし、名

(26) 地柄と図柄を分離する。地柄から図柄を取り出す。

(27) 注 31

(28) 本稿 p6、SN1-4-4 「（カーマは渴愛によって生じるが）チトラニは存続し続ける」。注 20 「生があって老死がある。如来の出現に係わらず、ダートゥは存在する」

と色に起こす渴愛を停止する<sup>(29)</sup>というとき、色とは愛人であるとともに、愛人のイメージでもあるといえる。この実体と心象との分裂は後で考察したい。

感受 (vedanā) の語は、Sn 第四章、第五章に出典がない。だが、Sn4 ①経には「名色との接触によって快不快がある」と記され、色→接触→感受→想を予想させる。また、

サムユッタ・ニカーヤの冒頭 SN1-1-2 に「喜びに泥むナンディーの生存が根絶されサンニヤー (想) とヴィンニヤー (識) が消滅することにより感受 (ヴェエダナー) が消滅するが故に平安 upasamā がある」とある。この意味は、「生存を楽しむ渴愛 (カーマ愛・有愛・無有愛)<sup>(30)</sup> が消滅すると、あれこれしたいと思う妄想 (想・構想) がなくなり、選択と決定行為 (識) がなくなり、苦楽を受け取る感受がなくなる」という意味であろう。

また、

SN4-2-6 には「形態把握 (色) と感受作用 (受) と表象作用 (想) と識別意識 (識)、これらは形成されたもの (行)<sup>(31)</sup> (Rūpaṃ vedayitaṃ saññā, viññāṇaṃ yañca saṅkhatam) であり、だから私ではない、これは私に属さない<sup>(32)</sup>と観て、貪欲を離れるて安穩を得る」とある。

これに対して、

SN5-10 「生ける者 (satta) とは単なるつくり出すもの (サンカーラ) のあつまりである (suddhasaṅkhāra-puñjōyam)。(五つの) あつまり (khandesu 五蘊) が有るとき、そこに生ける者を構想 (sam-man)<sup>(33)</sup> してしまうのである。苦しみだけが生じては持続し消えていく。(真に) 存在するのは苦しみのみである。」

中村元先生は、SN4-2-6 のサンカタ saṅkhata は SN5-10 のサンカーラ saṅkhāra と同じ意味であるとされるが、この解釈にはもう一つの可能性がある。

(29) Sn4-①では、名と色を私物化を停止と説き、SN1-4-4 では、名と色への渴愛を止める。

(30) 前掲拙論で示したように、有愛・無有愛が登場するのは Sn4 ②経である。そして三愛として SN 転法輪経にまとめられる。

(31) 五蘊の初出は SN4-2-6 「rūpaṃ vedayitaṃ saññā, viññāṇaṃ yañca saṅkhatam 色と受と想と識、これらのサンカタ (つくられたもの、構想されたもの、有為) は私ではない」。輪廻の生存の素因としてこれらを列挙する。色は身体を含む全ての構想された形である。次の注にみるようにヲラニ (唯識など経の作者によってはヲラニを設定しない) や縁起は五蘊の色とは無関係に持続する。しかし想がそもそもサンカーラ (サカタの動詞) でありパカッパ (構想) なのだから、色も受も識も想の一部とも考えられる。(色・受・識) 〇想=行 (サンカタ) である。

(32) 色受想識の四つは行であり私でない<sup>(34)</sup>と訳すか、色受想識行は私でない<sup>(34)</sup>と訳すか。意味から言う<sup>(34)</sup>と前者である。

(33) 注 38 na-asad na-sad asīta-mṛtyurāsīdamṛtam/

(34) 中村元著岩波文庫「悪魔との対話」p316

カーマの最初の説明は既にみたとおり Sn4 ⑮経洪水偈の「渴愛がカーマを構想 (pakappa) する」である。SN1-4-4 では「カーマとは Saṅkapparāgo である」。カーマは pakappa されたものであり、つくられるという意味ではサンカタ (< sam-kr̥ の pp.) である。であるから、SN4-2-6 の読み方は「色受想識はつくられたものであり、それ (単数で受ける sg.) は私ではなく、私の所有でもない」となる。SN5-10 は、無我を説いた初出の經典とされるが、その直前の経に SN5-9 「五蘊 (khandhā) と六界 (dhātuyo) と六処 (āyatana) は、縁によって生じ縁によって消滅する」と記すから、SN5-10 は「生ける者は単なるつくり出す (サンカーラ) もののあつまりである」であり、このつくり出すとは後に行と訳されるが、ここでは、構想 (pakappa) と同じ意味であり、SN4-2-6 の訳は「生ける者はそれ自体は無垢なる (suddha) 構想を次々と生み出すものである。その生み出された諸蘊 (構想されたものはカーマ、五蘊あるいは SN4-2-6 の四蘊) が存在すると断定するとき、次には生ける者が構想されるのである」となる。

ここでは後に定説となる五蘊は完成していないように思う。この SN5-10 を継承展開して、「人間存在とは何か」という問い、いやそれよりも、「釈尊は滅後どうなったのか」「人は死んでどうなるのか」という問いに対して、「生ける者とは、色 (身体や構想 (pakappa) された色形) と感受と想と行 (サカ-ラ、構想する能力) と識 (自我意識) である」つまり「生ける者とは五蘊である」という答えがなされたのではないか。それは、第一古層では問題になりにくかった「生と老死の苦の解決」という第二古層 Sn 第五章以降の滅後の存在に対する答えである。その理由の一つとしては、この無我を説く SN5 (第五篇) は、一連のものであり輪廻からの解脱を説く。SN5 の第六節から順に第六節で「生の苦、死の苦、殺害などの苦、総じて生を喜ぶな (一切皆苦)」、第七節「天界に生まれることの苦」、第八篇「一切の業と生存の素因を滅する解脱」、第九節「(上記の)縁起、これらを説いて最期に第十節 SN5-10 で、「五蘊 (つくり出すものの) 無我と唯苦存在 (一切皆苦)」を説くのである。

以上より以下のように結論できる。

カーマとは欲望ではなく、欲望が向かう対象、あるいは、欲望によって膨れ上がった

(35) 中村元、原始仏教の思想 I p501 「初期仏教における我に関する見解は、… これを無我説と呼ぶことを躊躇する。… ヴァジラーニの所説 (SN5-10) は、… 決して「アトマンが存在しない」とは説かなかった」

(36) 注 20 「生があって老死がある。如来の出現に係わらず、ダートウは存在する」

た対象に関連する印象の総体<sup>(37)</sup>である。ならば、カーマの構成要素は、奪い合われるものであり感覚を刺激する当体と、受け止められた色・受・想・行・識であり、つまり、対境と五蘊である。

**奪い合いにおいては、カーマ＝物自体（チトラニ）であり、**

**意識としての所有は、カーマ＝色＋受＋想＋行＋識である。**

そして

**カーマには、過去のカーマ、未来のカーマ、現在のカーマがある**

と説かれる（Sn4 ⑮経 949 偈）。だから次のように説くのか。

SN1-1-10「過ぎたことを悲しまず、まだ来ぬ事を心配せず、いまを生きる」

以上から「カーマの消滅」＝「五蘊は私ではない」<sup>(38)</sup>であり、五蘊が私で無いとは、カーマを消滅させるという目的をつきつめていった結果である。しかし、この目的は、カーマを自分ではないと思うこと<sup>(39)</sup>によって達成されるのではなく、渴愛を停止することによってのみ達成されることは既に解明した。

### （三）、輪廻説との関係

#### （1）、Sn4 ⑮経は輪廻に言及せず、即座の平安を説く

「武器を手にする経と死後を憂う経の比較により釈尊の原体験を特定する」（普通寺教学振興会紀要 21 号）に示したように、

Sn4 ⑮の釈尊は、ナーマルーパの私物化を停止して一切所平等平安を得るのであり、時空を越えているのである。であるから、輪廻しても輪廻しなくても、釈尊は渴愛を解決していまここに苦を滅して、「まだ来ぬこと（将来）に向かっても企図しない」<sup>(40)</sup>のだから、来るべき輪廻に対しても無頓着なのである。

(37) 茂木謙一郎さんが言う「クオリア」のようなものであろうか。脳科学では、私達が何かを経験すると、その経験が記憶されるが、その記憶とは視覚などの感覚パターンと痛覚などの快不快という感受と喜怒哀楽などの情緒などがセットとしてニューロンを構成し、そのセットが他のセットと連絡をとっているという脳のニューロン分布から起きるとされているか。

(38) カーマ＝物自体とすると、カーマの消滅によって、全存在が消滅することとなる。この場合は、奪い合いがなくなるということと考える。ナーサッド・アーシーティア讃歌によれば、無→有→意欲→思考であり、ウパニシャッドにおいてウッターラカ・アールニは唯一存在として「有」を認め、それが意欲して多（諸存在）ができるとする（ChUp\_6,2.1 tad aikṣata ,bahu syām）。Sn4 ②経冒頭 bahunābhichanno/ 私達は自分の周りを多なる装飾品（カーマ）で満たす。

(39) カーマの除外は魂の浄化（アートマン化）とも考えられるし、所有の放棄とも考えられる。その完全な除外は唯識によって完遂されるのか。しかしその目的は解脱か。

(40) pacchā te māhu kincanam

それでもなお、このように反論できる。

釈尊は、輪廻のカラクリを知っていて、「将来に期待しないものは輪廻しないというカラクリに従って、無願のものは解脱するから何も無いようにせよ」と語ったのか。しかし釈尊は各所にディッティ(見解・ditti)を懐くことを禁止<sup>(41)</sup>している。私の見解では②経が初めて有愛・無有愛を離れることを説き、その意味は、罪を犯した者が「地獄が怖い」とか「生存が消えてなくなれば良い」と来世を恐れる疑問や、弟子が釈尊は死後どうなったかという疑問に対して、「来世に対しての欲求があるからそのような恐れをなすのであり、カーマを持たないことが釈尊の教えである」と論したと解する。つまり釈尊はあらゆる欲求から解放されているからカーマ愛も有愛も無有愛も欠如して、来世に対する不安から解き放たれているのである。

ところが、Sn 第五章になると、誕生と老死が苦であり、その克服が主たるテーマとなる<sup>(43)</sup>。

## (2) Sn4 ⑮⑩④⑨⑥経は輪廻に無関係に即座平安を説く

中村元先生、荒牧典俊先生が明確にされている初期經典の成立史の順に見ていくならば、①最古層の Sn 第四章では、輪廻は明確には問題にされない。しかし②経⑩経において死後の生存が問題にされて、「この世も別の世も望まない」というように、覺者は、この世的な生存をの望まないという形で説明される。それに対して、⑮⑩④⑨⑥経では、死後に平安が得られる、あるいは死後にいまよりも完全な平安が得られる(後のパリニツバーナ)というよりは、(見えない矢を抜いて)即座に最高の平安が得られると説くのである(あたかも即身成仏<sup>(44)</sup>のように)。それは次のようである。

Sn4 ⑮経 939 偈「見えない矢を抜いたなら駆けめぐりこともなく沈むこともない」  
952 偈「(名色の私物化を停止した者は) 敵対して冷酷になることもなく、取り込んで我が物にしようと貪欲になることもなく、敵とか味方とかと動揺することなく、あらゆる所に、あらゆるものに対して、ありのままに平等に接する」

(41) スッタニパータ 4 章 (Sn4) ④⑤⑨経

(42) 諸先生は、avitatanhāse bhavābhavesu を「種々に生存を求める」と解釈する。私は ubhosu antesu vineyya chandam は、二つの対極のもの、最高が得たいとか、死んでしまいたいとか、好悪、快不快などの上下を好むことを意味していると考え、また⑩経には、bhāvavibhāva が説かれることから、ここで既に有愛・無有愛が説かれると解した。

(43) 初期仏教と輪廻については榎本文雄先生「輪廻思想と初期仏教」に詳細に論説。

(44) Up でもウッターカは死後悟を説き、ヤジニャヴァルカは即悟を説く

954 偈「聖者は、このままが良いと説くのではなく、より悪い状態を説くのではなく、より良い状態を説くでもない。彼の欲矢は無くなっていて、安らぎに住して、取り込むこともなければ、捨てること(吐き出すこと)もない」

⑩経 853 偈「快適な方向へと流されず、自分が優れているとかいうことに無頓着で、柔和でこだわりがなく説法が自由自在である。そしてだれかれに染まることもなく、無関与というわけでもない」

860 偈「彼は欲がなく何かを得てやろうとか保持しようとか思うことが無くなっていて、もっと良くなりたいたか、今のままでいたいたか、さっぱりしたいたか言わない。どうこうしてやろうという構えがなくなっているから(カーマの)構想へと赴かない」

861 偈「彼には自分のためとか自分の損得とか自分の増減というものがない。だから無くなっても歎かない。彼はもろもろの存在(dhamma)を得ようとそちらへと入り込んで行かない。彼は平安なるものと言われる」

⑩経 811 偈「ムニは何処にも寄り掛かることがなく、何かを愛することも憎むこともない。あたかも蓮の葉に水がつかないように彼には私物化した独占し自我肥大することによる(自他の)悲しみが無い」812「蓮の葉の上の水滴や蓮華上の水が汚れないように、ムニは見聞思考において汚れない」

④経 794 偈「彼は妄想分別(kappayanti)しない。何かを目の前に打ち立て構想(purekkharonti)しない。これが究極の清浄だなどと言わない。彼は自分が把握してきて溜め込んだ束縛を捨てて、世間の何ものについても願望を起こすことがない」

795 偈「バラモンは境界を超えて行き境界を持たない。彼は観る。彼は知る。しかしそのものを取り上げて握り締めることがない。彼は欲に染まる世界に染まらず、欲に染まらない世界にも染まらない。彼には取り上げて「超える何か」とするものがない」

⑩経 845 偈「あたかも水から生える棘ある蓮が泥に汚れないように、そのようにムニは貪欲なく欲望物にもこの世界にも汚されず平安静寂を説く」

847 偈「想の観念を離れた人には彼を縛るものはない。般若智慧によって解き放たれたものには意識の低下がない。既成観念 sañña と見方 diṭṭhi にしがみついた人は、あれこれにぶつかりながらこの世を遍歴する」

ここでは、聖者は、見る、聞く、感じるなどを体験するが、カーマを構想したり、それを自分のものとすることなく、関与するでもなく関与しないでもなく、経験しつつ、説法も行うのである。

### (3)、死後解脱の考察

以上の即座の平安に対して、解題で引用した「生と老死を克服する経」「再誕生をしない経」「自殺を認める経」などは、明らかに死後の苦や再誕生の苦を問題にしている。その発端が Sn4 ②経であることは「武器を手にする経と死後を憂う経の比較により釈尊の原体験を特定する」に詳説した。ここでは再度、釈尊の教説は「カーマ愛」の克服であり、そのカーマ愛に有愛・無有愛が含まれること

を示したい。

(カーマへの渴愛 = a、構想 = b、カーマ = c、有愛または無有愛 = p、来世 = r) とするならば、

$(c, r) = (a * b, p * b)$  となるが、

Sn4 ⑮⑩④⑨⑥経では、 $p \subset a$ 、であるから、 $a = 0$  のとき、 $p = 0$  であり、 $(c, r) = (0, 0)$  である。

転法輪経では、 $a \neq p$  であるから、 $a = 0$  かつ  $p = 0$  ならば  $(0, 0)$  である。

Sn4 ②経は、上記のどちらとも考えられる<sup>(45)</sup>。

Sn4 ⑮⑩④⑨⑥経と②経では、来世もカーマの一種であり ( $r \subset c$ )、カーマを構想をすることをやめれば、来世はなくなるのである。釈尊はそう考えたに相違ない。そのとき、渴愛 = 0 でなければ、構想 = カーマ = 0 は有り得ない。

(カーマ = 0) ならば、(渴愛 = 0 あるいは渴愛 > 0) であるから、カーマが無い時に渴愛がないとは限らない。

ジャイナ教では (渴愛 = a、所有 = g、カルマ = h) のとき  $(0, 0, 0)$  でなければ輪廻する。

ヤージュニヤバルキアは「アトマンを知るものは、不死を得る」と記す (ただ見る主として有るが財を得ると記す、知るものは行為が許される)。

釈尊は、いまここに  $(a, b, c, g, h) = (0, 0, 0, 0, 0)$  で平安を得る。

釈尊は知ることよりも、制欲 (抜矢) を重視した。そしてカルマ (過去の所有) は、過去現在未来においてカーマを消滅することで解決できると考えたのではない。「過去をくよくよせず、まだ来ぬ事を不安がらず、いまここにつくることがないのだから」、臨終に肉体の痛みを耐えることはあっても、泰然であった。

## (4)、説法自在と共苦

聖者にとっては、カーマは不在であり、正しい体験と正思惟が生じる。カーマの不在とは、五蘊の不在に等しい。渴愛が制御されて、愛人は愛人でなくなり人となり、人は人でなくなり、動物となり、動物は動物でなくなり、タンパク質となり・・・様々なダルマに考慮されるが、特定のものは定まらず、ダルマ相互の関係においてのみ考慮される。それでも、説法がなされるように、人の痛みや苦しみに対して関与するのであって、渴愛が制御されると同時に、「誰にとっても自己がもっとも愛しい」というような思いに貫かれていなければ、つまり新たな

(45) 拙著「武器を手にする経と死後を憂う経の比較により釈尊の原体験を特定する」に詳説

矢に突き動かされていないければ、ダルマは思惟されないのである。

SN1-3-4 には、「思考分別の全てを遮断すべきではない。自制された心は抑制すべきではない。悪の生じるその時その時に、適時制御すべきである」

として適時に分別すべきことが書かれ、

SN4-2-4 には「人の為を思い哀れむから説法する。それによって心が同化したり反駁して揺らぐということから解放されているから」

と説かれるように、「名指しされたものは空（その実体がない）」ではなく、適時に考慮されるのである。

(渴愛 = a、構想 = b、カーマ = c、共苦 = d、適時の思考 = e、共苦の対象 = f) とするならば、(ただし、渴愛と共苦は別物とする、共苦もなく明智もない場合もないとはいえない)

**$b = ax$ 、 $e = dy$ 、 $(c, f) = (a * b, d * e) = (a * ax, d * dy)$**

**$a = 0$  ならば、 $c = 0$ 、 $d = 0$  ならば、 $f = 0$ 、**

ここで、 $d > 0$  を認めないならば、 $(c, f) = (0, 0)$

その人の目の前には何もないこととなる。<sup>(46)</sup>

なぜなら、あらゆる欲求がないから、構想が起こらず、カーマも正智慧も構成されないのである。

SN1-1-3 に「善行を行うものも死に導かれるさだめである」と記す。「生命は(死に)導かれる。寿命は短い。老いに導かれていった者には、救いがない。死についてのこの恐ろしさに注視して、幸福をもたらす善行(Puññāni)をなせ」。尊師は、(これを否定して)曰く「生命は(死に)導かれる。寿命は短い。老いに導かれていった者には、救いがない。死についてのこの恐ろしさに注視して、世間の利欲を捨てて、静けさ(santi)をめざせ」。

善行とは、「天国に生まれるために資するとされる行為」。他人を救い、その善根によって良いところに生まれようとする者は(有愛があるから)、輪廻から解脱できないというのである。

では、そのような自我の利得に塗れていない純粋な共苦というのが有るのだろうか。SN5-10「ただ苦しみだけがある」というように、他生に苦しみが生じているとき、その苦を共感するということが可能なのか。こう書きながら思い当たる

(46) Sn5 ⑦経には、「(どのように修行したら良いのかとという問いに対して) 念じつつ、何物も前に見ないようにしながら、何も存在しないということを振り所として大洪水を渡れ。欲望の対象を捨てて、論を離れて、渴望の滅尽を夜に昼に見続けなさい」と説かれる。五蘊が自分ではないと観て渴愛を離れる(SN4-2-6)の因果逆転に類似。



のは、最古経 Sn4 ⑮経の冒頭 5 偈

「武器を手にして恐懼した。(そして殺すのをやめて) 人々が同様に闘争に苦しんでいるのを見て、その解決を発見したことを語ろう」である。

釈尊は戦士階級であり、実際に臨戦して「相手に共感共苦した」のではないのか。この論考はまだ結論に達していないが、冒頭 5 偈に続くカーマの消去がその後の経典発展に綿々と受け継がれていることは間違いない。ならばその源泉であるこの釈尊の嘆き＝共感共苦と人類の苦への共感を否定することはできないだろう。そうすると、カーマの中から(あるいはカーマと正智慧の混沌の中から)カーマと正智慧を分離した、否、知識<sup>(47)</sup>ではなく、自我の拡大という渴愛をその共感が凌駕したからこそ、釈尊は釈尊たり得たというべきではないのか。

## (四)、五蘊は私ではない(非我)と説く各経

㉗五蘊が闘争や所有の無常を生み出すから(渴愛を制して)五蘊を解消する

まず、Sn4 ⑮①⑩④⑨⑥②、Sn5 ⑰、SN1-4-4 などは、渴愛を制するから構想がなくなり、カーマ＝五蘊が消滅すると説く。

①五蘊のうち識と色の消滅によって、生と老死が克服されると説く。人間は物を手に入れる生き物であり、色があるから殺害や苦がある故に、識と色を消滅させる(再び生まれぬ為に色を滅す)

Sn 第四章に続いて成立した Sn 第五章の多数の偈は生と老死の克服を問題とし、識と色の生滅を説く。⑦経に「何物も前に見ないことで何も存在しないということを抱き所として、大洪水を渡り(渴愛が構想するカーマの汚泥世界 Sn4 ⑮経)、想から解放されどこへも行かず静止する。意識が有るか無いかは不明<sup>(48)</sup>であり、名称と身体(nāmakāya)から解脱して、姿が見えない」と説く。

⑦においての苦は、闘争、奪い合い、短命、死後の不安などであるが、①は、死後の再誕生が問題なのであり、色(身体)がある限り、苦から解放されないと考えたのだろう。

Sn4 ⑮経には、Sn 第四章で唯一「色の消滅」が説かれる。

(47) 智慧とは決断簡拙の義。アピダラ、即身成仏義。

(48) Sn5 ⑩経 1091 偈「彼は願いのない人である。彼は願わない。彼はただ正しく見る人であり、正しく見ることを企てる人ではない」Sn5 ⑮経 1114 偈「真実の人(如来)は、全てにおいて識別意識が存続していることを知り抜いていて、解脱し向こう岸に渡っても、この識別意識の存続することを知っている」

871 偈「接触（経験）にもとづいて、快と不快がある。接触がなければ、快と不快は生じない。名称と形態が縁となって、接触が起こる。（そして名称と形態への）欲求にもとづいて所有が起こる。それらへの欲求がなければ、「我が物とすること」はない。（欲求される）形態がないときには、接触は働かない」

873 偈「どのように修行するものにとって、形態（rūpa）はなくなるのか。また、苦と楽はどのようにしてなくなるのか」

874 偈「構想されたものを見る想いではなく、また、想いを離れた想いでもなく、想うことがないのでもなく、想いを消し去ってしまったのでもない、そのように修行する者には形態は消滅する。というのは、何かがあると構想する想いに立脚して、あれこれへと広がりをもって数えることが始まるからである」

この⑩経には、色・受・想が登場し、想を変革することで、色が消滅する。色との接触がなくなると渴愛や所有がなくなると説く。

渴愛が消滅して色がなくなるといよりは、想のあり方が変化して色なくなると説くのである。渴愛 = a、想 = b、色 = c とするなら、

(c) = (a \* b) ではなく、(a) = (b \* c) であろうか。

前者は、食欲がなくなれば、パンに興味がなくなる

後者は、パンが（あるにもかかわらず）無いと思えば食欲が消える

どうも後者には無理があるように思うがどうだろうか。

前者も、空腹なときに食欲がなくなるというのは無理である点では同様だが。

考えられることは、想とは心に相（nimitta）を懐く＝持つことであり、相（姿）を持つことは、色（rūpa, kāya 身体）を持つことであると考えたのであろう。その根底にはナサッド・アシーティア神話のような神秘主義を想定する他ないが、それは釈尊や⑮⑩④⑨⑥経が嫌ったところの「見解（特定の世界観や前提条件）を持つ」ことではないのか。釈尊は、カラクリ（特定の存在論や認識論など）を最も嫌うのである。なぜならそのカラクリが闘争を生み、苦しみを温存するからである。たとえば大儀による戦争の様<sup>(49)</sup>にである。

### ⑤五蘊は本来の自分ではないから五蘊を切り捨てて渴愛を制する

SN4-2-6 には「形態把握と、感受作用と、表象作用と、識別意識とは形成されたものであり（あるいはこの五蘊は）私ではない、これは私に属しないと観て、貪

(49) Sn4 ⑨経 847 偈「既成観念 sañña と見方 diṭṭhi にしがみついた人は、あれこれにぶつかりながらこの世を遍歴する」837 偈「私は理法を決定しそれを握り締めて「これが理法である」と説くことはしない。諸々の見解主張には執着があることを見てそれを取ることなく、取るべき内なる平安を発見しているのである」

欲を離れるて安穩を得る」とある<sup>(50)</sup>。

SN5-10「有情は存在せず、五蘊のあつまりを仮に名付ける。苦のみある」とある。先に見たように、五蘊とはカーマのことであり、その五蘊が私ではないというのは、実は五蘊が消滅していないことを認めている。つまり

五蘊非我説は、五蘊＝欲望による構想＝カーマ≠0、  
五蘊非我説は、カーマ>0である。

**ということは、渴愛>0かつ構想>0である。**

これは明らかに主客転倒である。酸っぱい葡萄において、葡萄が欲しくなくなるから葡萄は存在をくまますのであって、葡萄が取れないから消えるのではない。この作者は「原初には他者存在（例えば葡萄）は存在せず、唯一なる者のみが有った（以下④4.に詳説）」などのディッティを前提としているようである。

この考え方は次の⑤で徹底していく。

**⑤五蘊は本来の自分ではないから五蘊を持たない**

SN5-10「有情は存在せず、五蘊のあつまりを仮に名付ける。苦のみある」

SN6-2-5<sup>(51)</sup>「つくられたものは無常であり、生じては滅びる。それらが静まるのが安楽である」

これは釈尊入滅の時に説かれたとして有名である。「あのあらゆる苦を超えた釈尊でさえ滅して不在となった」ことへの驚嘆と不安の言葉か、あるいはナサッドアーシティア神話への回帰か。

次の四段階を仮定する

### **①上記⑦、釈尊の愛弟子までの時代**

最古層であるSn 第四章には五蘊が自分でないとか、五蘊を無いと思えということとは説かれない。ただし①①経に、想が改変して、色が滅することが説かれるが、「その色のない状態が、霊の最高の境地なのか、それとも全てが消滅する状態なのか」

(50) 中村元、原始仏教の思想 I p501「初期仏教における我に関する見解は、…これを無我説と呼ぶことを躊躇する。…ヴァジラー尼の所説(SN5-10)は、…決して「アトマンが存在しない」とは説かなかった」

(51) Aniccā vata saṅkhārā, uppādayavayadhammino;Uppajitvā nirujjhanti, tesam vūpasamo sukho' 諸行無常の初出(Sn4、Sn5、SN 有偈章の神々の章では説かれなかった)

(52) 次の四つの想でない想だという。

①個々を何々であると固定化していく固定観。識別すること。aをaとする把握

②個々が存在しないと観る固定観。識別しないこと。把握を止める把握

③観が全くなくなること＝無念無想。無。判断停止。把握がないこと

④ルーパを滅していく固定観。識別を消すこと。色が無いという把握

の問いに対しては、聖者は論議しないとして不明にする。

### ②上記①、釈尊滅後に「釈尊が滅後どのような存在になったか」を問題とする時代

しかし、⑥経で命の短いことが問題とされ、②経では死後の恐怖が問題となる。その流れは、⑤に引き継がれ、Sn 第五章では、生と老死の克服が課題となり、生き物は物を手に入れる生き物とされたり（⑬経）、身体が殺戮やその他の苦の源泉であると説かれ、身体を無くすことが安楽に繋がるのであり、再誕生しないようにすることが⑭経には説かれる。

### ③上記②、手段としての五蘊非我が定説となっていく時代

本来の渴愛停止が渴愛などを消滅するために考案した「何も存在しないと見る観法」が定着していく。

### ④上記③、「釈尊在世の仏教⑦」が忘れられて身体のない状態が最高とする時代

⑦の釈尊<sup>(53)</sup>の境地が忘れられ、身体のない存在が釈尊の仏果であると弟子たちは思い始めた。

## (五)、カーマと五蘊（無我）の関係の結論

### 1. 欲望論と存在論の混同

渴愛をなくすことで、構想がなく、カーマがなく、対立がなく、苦悩が無い。

これが釈尊の教説（Sn4 ⑬経の冒 5 偈と後半部分の異同は後説）であったが、構想されたもの=つくられたもの=五蘊がないことが良しとされる。

SN8-4 では、「欲望の対象の特徴(Nimittam)を避けよ。形成されたもの(Saṅkhāre)を自分に非ずと見よ。身体の不浄観をなせ。欲情を静めよ。厭世せよ。無相を修せよ」と記す。後の無我、無相、無願、空などが観法として説かれる。渴愛を静めることが第一であったのが、次第に、「何も無い」、「自分ではない」、「願わない」、「そのものは存在しない」という見方や存在論議へと移行していくのである。

しかし、釈尊の議論では、五蘊は渴愛がなくなならない限りなくなならない。あるいは渴愛がなくなっても、真の五蘊のようなものが出現するのである。たとえば共苦（慈悲）の勃興によって、真の五蘊が出現する。あるいは五蘊とは別の適時の分別が出現する。

(53) 渴愛が制せられ構想が制せられカーマの正体が暴かれて、ぶつかり合わず奪い合わずいつでもだれとでも即座に平安であり、正しい思惟、あるいは共苦に貫かれた説法が自在な境地（「武器を手にする経と死後を憂う経の比較により釈尊の原体験を特定する」（普通寺教学振興会紀要 21 号）

## 2.無常の勘違い

⑥経に所有物は無常だから失われ悲しいと説く。無常が悲しいのではなく、所有が失われるのが悲しいのである。これについて釈尊は (Sn4 ⑮) 「所有しないものは悲しまない」と語っている。釈尊は所有しないか、あるいは所有の観念を克服しているのだから、失わないし、失っても悲しまないのである。⑮経⑥経のニュアンスからして、無常とは「生まれたものは滅する」ということではなく、所有が不安定なことを言う。得る時に奪い合いがあり、得たなら保持する不安があり、失われる悲しみがあり、もろもろの苦難がある (Sn4 ①経) ことが、ニトヤ (nitya 恒常) でないと語られたのである。

ところが、釈尊の入滅に際して、「あの完全な平安を得た聖人でさえも身体を失ってどこへ行くのか」との疑問や不安が弟子を襲ったのである。特に釈尊を知らない弟子たちは、釈尊は死して恒常の悟りを輝き続けると思ったであろう。すなわち滅ぶことは想像外であり、この点からも無常なるものは嫌悪されたであろう。ここで、無常なるものとは何かに注目したい。無常なのはカーマの集合である。カーマの集合とは、すなわち、五蘊である。

(カマ=渴愛\*構想) ⇒ (カマ=サツカ=五蘊) ⇒ (サツカ=無常) ⇒ (集法=滅法)  
釈尊はそうは説かない。

(カマ=渴愛\*構想) ⇒ (渴愛=0のときカマは滅) ⇒ カマは条件的存在 ⇒ (カマ=集法であり無常であり縁起である) ⇒ (カマは滅法故に空)

そして、転法輪経に「およそ集法なるものは滅法である」と記されることとなる。ここで集法とは五蘊のことだから、真新しい説ではない。問題なのは集法は渴愛=0のとき滅であるが、渴愛>0のときは有法なのである。すると転法輪経は正<sup>(54)</sup>確ではない。正<sup>(55)</sup>確には「集法は渴愛が制せられるとき滅法となるのである」

また、共苦  $d > 0$  のとき  $(c, f) = (0, f), f > 0$  である。全てが無常ではなく、明智が生じる。(共苦も消滅するとすると明智も無常と言えなくはない)。

よって、釈尊の Sn4 ⑮経の無常に関する説を以下のように結論づけたい。

**渴愛によって生じる五蘊は渴愛が消滅すると消滅するという意味で無常であるが、共苦によって生じる明智は無常とは断定できない。諸行無常は、もろもろの**

(54) 注 20 「生があって老死がある。如来の出現に係わらず、ダートウは存在する」

(55) 「苦を生む真理 (苦集聖諦) とは再生誕を伴う渴愛であり、カーマ渴愛、有愛、無有愛である」と記され、苦と再誕生の原因が渴愛であることを明記はしているが、法眼への傾斜が見られる。

行=つくられたものは、渴愛が制御されるとき消滅するという意味で無常である。

### 3. 苦の所在を見失なった

釈尊にとっての苦は、ぶつかり合い奪い合う苦であり、その苦を衆生もどうように苦しんでいるのを見て相哀れむという共感苦であった。

しかし、多くの悩める人々がサンガに入団してきた一方で、バラモン僧たちも多く入団しただろう。また当初苦難に満ちていた人々も、生活が安定し、平等なサンガで安穩を得ていく中で、苦とは、亡命苦・人身売買苦・差別苦・殺害苦などから次第に死後の苦を含んだものになっていっただろう。

こうして、苦は、生存苦から死後や再誕生の苦へ、そして一切皆苦や五取蘊苦（五蘊があること自体が苦）に変化していったのである。転法輪経などに、「五蘊の存在が苦である」、「つくられたものは滅ぶ（それは苦である）」と説かれるのである。（それでも転法輪経は、苦聖諦とは四苦八苦であるが、総じて五つの受け取る集まりであり、その原因は、カーマを求めること、有や無を求めることであると記すのであり、渴愛こそが苦の元であり、苦とは渴愛によって受ける色や受や想であると Sn4 ⑮経を踏襲している）。

### 4. 宇宙展開の歌 = ナーサッド・アーシーティア讃歌への回帰

ここで思い至るのはインドの世界創造神話である。ブルシャの歌による巨人伝説と、非有・非無から唯一なるものが意欲して個別存在ができるというナーサッド・アーシーティア神話である。後者は原初に「無もなく有もなく死もなく不死もなかった」そこに次々と展開する。すなわち→「唯一なるもの（eka）にカーマ（動詞）が現れる」→「思考力（mana）の種子」→「男性的女性的生殖力」→「もろもろの生き物個々物へと展開」。

「無（非有）もなく有もない」というのは、Sn5 の「覚者は何処にも見られない」に対応する。その起源は Sn4 ②経の「この世も別の世も望まない」であり⑩経では「有なのか無なのか」と問うて答えず、Sn 第五章以降は、「この世にもあの世にも見られない」という形で定式化する。そして転法輪経では「有愛・無有愛を離れる」というように、「原初には無もなかった有もなかった」に呼応するのである（有無中道）。

更に、Sn5 が「生と老死を克服する」を本題にしているのは「原初には死もなかった不死もなかった」に呼応する。

また、「唯一なる者がカーマ（欲望）を起こして思考して多々のものに展開する」は、「渴愛が構想（思考）してカーマをつくる」そして「カーマ愛・有愛・無有愛の三つの愛が色受想行識の五蘊に展開するのであって、（そもそも五蘊は原初の存在である唯一なる者ではないから）私でない」に呼応するのである。

その説の成立順から考えると、

1. 無もなく有もなく死も不死もなく、唯一なる者がカーマして諸存在が展開するという神話を基にしたウパニシャッド (Up) が流行する
2. それに対して釈尊は現実の奪い合いなどの生存苦を問題にし、Up 哲学では、闘争苦が解決されないことを見抜き、見えない矢を抜くことを宣言する
3. 釈尊の今現在の苦を除く行動に多数者が参加してサンガを形成し、不殺生不偷盗の治外法権的な共同体が完成する（テーラーテーリー偈参照）
4. バラモン階級や学者が参加する中で、闘争苦は忘れられ Up 哲学へと回帰するが、大衆運動となった仏教サンガは、二つの方向を模索する。一つは厭世解脱であり、もう一つは釈尊へ戻れであり「共苦」を起点とする闘争苦という課題の回復であり、完全涅槃（唯一なる者への帰還）に赴かず、この世の苦と格闘し続けるのである。
5. 無我説に関しては、Up が、アートマンという唯一なる者 (I-eka) を措定するのに対して、完全涅槃主義者は、そのエーカを通り越してそれ以前の原初のものへと舵を切ったのではないか。すなわち無もなく有もない原初の状態である。
6. しかしこの原初の状態へと向かうことは、すべての議論が霧消することであり、あらゆる議論あらゆる見解を御破算にすることである。その時、様々な思い込み（構想）の向うにありありと見えたのは、苦しみの現実とそののっぴきならない解決ではなかったか。そうだとすると完全涅槃主義者も「共苦」主義者と同じ土俵に戻るのである。つまり今現在の苦を生きるという、具体的苦に臨場して適宜に見えない矢を抜くという生き方ではないか。

## (六)、渴愛・カーマと空・唯識・大楽との関係

### (1) 空と唯識について雑感

渴愛がゼロ ( $a = 0$ ) のとき、構想もカーマもゼロとなる。チトラ二はある<sup>(56)</sup>が、カーマは消滅する。空は「śyūnyatā ゼロ、空っぽ」の意味であり、渴愛が

(56) 注 20

制せられるとき、構想 (pakappa、虚妄分別 prakaiṇa) もカーマ (凡夫の認識対象) もゼロ=空である。

ここで、渴愛や慈悲を変化させれば、 $(c, f) = (a * b, d * e)$  であるから、カーマや明智はそれに対応して変化する。増減・好悪・生滅・長短など、視点と渴愛を変化すれば、変幻自在である。空の意味は、以上から「渴愛の変化に応じて対象認識=カーマが変化するという意味で空<sup>(57)</sup>ぽである」が起源か。

唯識の偏計所執 (parikalpita-svabhāva) は、構想されたものだがそれ自体は存在しない性質である。カーマは、渴愛によって構想されたものであるから、渴愛が消滅すればカーマは消滅するという意味で、構想されたもの=カーマは存在しない。唯識三十頌では「現前立少物」を認識しないとき唯識であると説かれる。それは SN1-2-10 の「名指しされたものには、そのものは無いと見よ<sup>(58)</sup>」に類似する。ゴードイカが自殺したように輪廻からの解脱を問題にした人々は、文字通り「一切を所有しないこと」目指したのだろう。「この世は空<sup>(59)</sup>ぽである」も、その意味かもしれない。

しかし、Sn4 ⑮経 954 偈「聖者は、このままが良い、もっと良くなれ、悪くなれと説くことなく、見えない矢が静まって平安であり、奪うことなく捨てることも無い na samesu na omesu na ussesu vadate muni, santo so vītamaccharo nādeti na nirasati」とあり、釈尊にとっては、世界のカラクリや、現前立少物の是非はどうでも良かったのではないか。なぜなら、釈尊は見えない矢を抜いて、渴愛を制御しカーマを克服していたからである。尚それよりも、問題にしたことは、ぶつかり合い奪い合う彼此の苦難であったからではないか。

## (2)徹底としての自殺と大楽思想

先に見たように、聖者はただ平安を得るのではなく、衆生を哀れんで説法する。そのことは⑮経で釈尊が「武器を振り下ろそうとして怯んだ」ことに原初がある。釈尊は相手を殺そうとするが慈悲故に怯んだのである。それは殺す恐怖であり、相手の痛みを知ることであり、他者 (衆生) も同様に怯んでいるということを見るという慈悲であった。そのことが後にも「共苦」として人間性の証明として他者の内面に正しいカーマとして「立少物」されるのである。

(57) Sn5 ⑮経、1119 偈「世間を空<sup>(57)</sup>ぽ (suññato lokam) と見よ。その者を死王は見ない」

(58) 唯識三十頌、知覚のみ (唯識) であると思っているときでさえ、知覚の向うに何かがあると設定するならば (「sthāpayam agrataḥ kim cit」漢訳「現前立少物」)、それは知覚のみではない。しかし、識が知覚の対象 (ālabhanam) を知覚していない (upalabhi) 時には唯識である。

(59) 注 47



そのカラクリはどのようにかという、aが限りなく0であり、dが限りなく大きいとき、 $(c, f) = (a * b, d * e) = (0, \infty)$ となる。

たとえば理趣経では、まずaをゼロにしていくことが説かれ<sup>(60)</sup>、継いで、空を得た菩薩は、大欲を得て大安樂を得て、一切如来大菩提を得て、一切如来摧大力魔を得て、遍三界自在主となって、衆生救済を実行する。その跳躍台は、渴愛 $\equiv 0$ 、構想（虚妄分別） $\equiv 0$ 、カーマ世界 $\equiv 0$ 、すなわち諸法空であり、唯識であり、 $(c, f) = (a * b, d * e) = (0, \infty)$ である。

## 5.結語

### (1)抜矢の方法

「武器を手にする経と死後を憂う経の比較により釈尊の原体験を特定する」にも示したが、釈尊が苦としたのはぶつかり合い奪い合う苦である。また、衆生が釈尊どうようにぶつかり合って苦しむのを見てその苦を背負ったのである。そしてその解決は見えない矢にあり、それを抜くことで苦は来世を待たず即座になくなる。

その矢の抜く方法は本稿に示したようにである。

**釈尊は、渴愛を制御し構想が制せられカーマが解消されて、ぶつかり合わず奪い合わずいつでもだれとでも即座に平安な境地を得る。同時に正念<sup>(61)</sup>、正知と共苦により説法と救済を行う。しかし釈尊の滅後の様態（=悟者の後の有）が問題とされ、生と老死の苦が次第に苦の座を奪う。所有の喪失苦、短命の苦、死後の苦が台頭し、果ては一切皆苦へと収斂<sup>(62)</sup>されていく。ぶつかり合う苦は、色持つ者は殺害をともなうという身体の苦の一因として残留し、この世的な生存を厭い嫌悪して三**

(60) 理趣釈「T1003\_19.0607b24 三業清淨猶如虚空。身語意業不被虚妄分別所生煩惱所染故也」「0608b29 以無縁大悲。遍縁無盡衆生界。願得安樂利益。心曾無休息自他平等無二故。名蘇囉多耳。由修金剛薩埵瑜伽三摩地」「0617a16 大慾得清淨大安樂富饒三界得自在能作堅固利者。…所謂大慧。是般若波羅蜜也。二、大靜慮。是大三摩地也。三、大悲。於生死苦不疲倦四大精進濟拔無邊有情令證金剛薩埵。是故現自在位同一蓮華同一圓光。體不異故。輔翼悲智。不染生死不住涅槃」

(61) 正念は sato < √ smṛ 覚える、忘れないの pp. 「良く肝に銘じて、失念せずに」という意味。Sn5 ②経 1035 偈。

(62) 一見綜合されていくように見えるが、個々の苦しみは捨棄されて、この世的な生存を全否定するという教条・ドグマ・見解 (ditti) に墮落していく。その結果として、三つの愛は有愛否定へと一元化し、この世を否定するのが第一義となる。そして（闘争→苦→制欲→離闘争→離苦）の因果関係が（一切皆苦→この世は苦→無常・無我・縁起・空の真理を見る→不淨観・無相・無願→離欲→解脱）という構図に置き換えられるのである。

つの愛（カーマ愛、有愛、無有愛）を一切皆苦に吸収されていく。ぶつかり合うから苦しいのであり、ぶつかり合わなければ苦しくないと言った「見えない矢のカラクリ」は厭世思想に取って代われ、ここに逆走が始まる。それに伴い「カーマ=五蘊が自分ではない（非我）」「五蘊は存在しない（無常・無我）」「五蘊の向うにあると思うものは存在しない（空）」「因による生滅（縁起）」が説かれるようになる。しかしこれは主客転倒というべきであり、苦の原因を釈尊は「見えない矢」または「渴愛による誤った構想」と見たのである。理法を見るから離苦するのではなく、渴愛とそれに伴う認識錯誤と奪い合いを解決することによって平安が得られると言った原点へと復帰すべきである。

## (2)カーマの二重性の考察

(二)の(1)カーマとは何か、に於いて「カーマとは㊦奪い合う対象㊧心に描く対象」の㊦と㊧の二種類があり、それはナーマとルーパの私物化と分析され㊦チトラニーや名前（社会的所有=名声・地位など）の所有であり、㊧色・何かがあると姿を認め、受・感受し、想・その好悪を判断し、行・さまざまに考慮し、識・分別をすることである。そしてこの㊦と㊧は釈尊の Sn4 ⑮経の冒頭5偈の肉声では分離しないどころか、分離しないことによって、闘争苦へと私達を貶めるあらゆる原因を「見えない矢」としてあぶり出すことに成功するのである。そしてその見えない矢を分析するカーマ論や名色の私物化論や非我論が展開されるが、それでも多くの場合、上記の㊦と㊧は厳格に分けられていない、つまり表裏一体のものとして曖昧に両義が保持されている。**カーマとは㊦でもあり㊧でもある。**

この問題点を説く鍵は、「ビナヤ vinaya」に有るのではないのか。SN1-4-4には明確に「カーマを求める渴愛を制御することによって罪は制御され、罪が制御されて苦が制御される Chandavinayā aghavinayo Aghavinayā dukkhavinayo」と記される。ここで Sn3 章 650 偈「生まれによってバラモンではなく行為によってバラモンとなく」を想起する。人間には区別がないと言った上で 648 偈「呼び名や民族や家柄などというのは思い込みにすぎない nāmagottam pakappitam・・・ただの観念である」「世界は行為で動き、人は行為で生き長らえる」と記す。だから、

**(1)行為=奪うことUカーマに執着することU構想することU渴愛すること**であり、存在論や認識論ではなく行為論で捉え直したとき、カーマ㊦とカーマ㊧は別物ではなく重なるのである。釈尊は、見えない矢を抜いて闘争回避したのではなく、武器を振り上げて、下ろせなくて、考え込み、さらに人々の共感苦を背負っ

て後に、見えない矢を発見し、それを人々に説き、共感を得てサンガに不殺生不偷盗を実現したのである。

**制欲→不構想→カーマの消滅→非闘争、ではなく自分の闘争→できない→共感苦→見えない矢→共に抜矢→抜矢方法の諸展開としてのカーマ論・私物化論・非我論・空など→皆の非闘争**である。

(2)カーマ①の解消を成し遂げたものはカーマ⑦の奪い合いをしない。しかし、カーマ①を理解しただけで習得しない(見道)の者が戒律を守らないならば、奪い合いはつづく。つまり、カーマ⑦を奪い合わない人のみがカーマ①を斟酌する資格を得るということである。そうすると次のことが言いうるのではないか。

奪い合いをしないことが必要条件であり、その原因は様々に考えられるのであり、その一つがカーマを妄想し妄想させたもの=カーマを奪わなければ気が済まないという五蘊の動きなのである。ならば、

**見えない矢=(渴愛U構想UカーマUフナニU名色の私物化U五蘊U……U等等)**

**カーマの本質はカーマの向うにあると思われる奪う対象である**

**だから、カーマの向うには何も無いと長老が言い放ったのである。なぜなら長老は既にそのものを放棄しているではないか。所有する者が同様に語ればそれは不妄語戒を犯す。**

参考付録 (諸先生の論考より古層順に並べ、特徴的な説を列挙)

	出家の動機 (苦は何・苦諦)	原因 (苦の原因・集諦)	解決法 (道諦) と 仏果 (滅諦)
	この世を否定しない経は◎この世を否定する経は▲どちらともいえない経は△ 制欲・離欲・無常・無我・非我・縁起・(真理を観る)・観離欲 (真理を観ることで)		
<b>①最古の経スッタニパータ 4章⑮経冒頭 5偈</b>			
Sn4 ⑮経冒頭 5偈	◎ 制欲	⑦闘争	見えない矢 矢を抜く ぶつからず沈まない
<b>①最古の経スッタニパータ 4章⑮経</b>			
洪水偈 945-949	◎ 制欲	⑦闘争	カマ汚泥に生きる苦 渴愛→構想→カマ 過去現在未来においてカーマを解消して安らか upasanto
名色の私物化 950-954	◎ 制欲	⑦闘争	名色の私物化 私物化を停止して一切所平等平安 自我肥大なく奪わず捨てない
<b>②第二古層スッタニパータ 4章⑮経以外</b>			
Sn4- ⑩経	◎ 制欲	⑦論争	論争せず平安である 柔和で説法自在であり、のめり込まず、無関心でもない saṅho ca paṭibhānavā na sad dho na virajjati
Sn4 ⑥経		⑥所有を失う苦	④不 kappayanti
Sn4 ②経	▲ 離欲	⑦罪と死後の恐怖	有と無への渴愛 この世もこの世と別の世も望まない

③第三古層スッタニパータ 5章					
Sn5 ○数字は 経を示す	▲		㊦所有・殺害 ①生と老死 ②私利私欲で所有 を分けない苦 ④⑤⑦⑩⑪生と老 衰自体が苦 ⑭ルーバは殺害、 苦がある	⑭ルーバは殺害、 苦がある→ルーバ を捨て不再誕 4-⑮の加害者→5- ⑰被害者	②正念(sato)と正智(prajñā)によつ て欲望を防げ ⑦「何物も前に見ないことで何も存 在しないということを抛り所として 大洪水を渡れ」と説く(月輪観) 4- ①に萌芽 識が消滅し色が消滅し苦が消滅
④第四古層サムユッタ・ニカーヤ有偈章 Deva					
1-1-2	△	離欲			喜びに泥むナンディーの生存が根絶され想 と識することが消滅することにより感受が 消滅するが故に平安 upasamā がある
1-1-3 & 4	○				世俗の利欲を捨てて平安を目指せ Lokāmisam pajahe santipekkho
1-1-7 & 8	○		㊦苦難		険しい世を平らかに歩む caranti visame sama'n
1-1-10	○	即成	苦難		過ぎたことを悲しまず、まだ来ぬ事を心配 せず、いまを生きる
1-2-10					「表象されない物は無い」と言っているよう だが、願わない物は無い という者にとっては、その物はないのだ。
1-3-4	○				思考分別の全てを遮断すべきではない Na sabbato mano nivāraye
1-4-4	○	▲ 制欲・離欲	㊦罪 ①再誕 カーマとは、欲 が構想したもの	欲 Saṅkapparāgo puri sassa kāmo/nāmarūpa smimāsajjamaṇam, Ak iñcanam /Acchecchi ta nham idha nāmarūpe nirāsam	渴愛を制することで罪がなくなる Chandavinayā aghavinayo 名色への執着が全くないものに苦は纏わら ない 名色への渴愛を絶てよ 無願のものは何処にも見られない
⑤第五古層サムユッタ・ニカーヤ有偈章 Mara					
SN4-2-4			㊦①衆生の苦	慈悲心	覺者が説法するのは相手を思いやる故也
SN4-2-6	○	非我			(非我)形態把握と、感受作用と、表象作用 と、識別意識と、形成されたものと(五蘊) は私ではない、これは私に属さないと観て、 貪欲を離れるて安穩を得る。
SN5-6	▲		㊦生は苦①殺害苦		生を喜ぶな
SN5-8					仏陀は業を破壊し所有を滅して解脱
SN5-9 縁起	▲	縁起			この個体は自作でもなく他作でもない。原因 によって生じ原因が滅すれば滅す。同様に 五蘊六界六処は滅ぶ
SN5-10 無我		無我	①有るのは苦のみ		有るのは清浄な有為の集合であり、有情 はない
SN8-4	○	観法			厭離、非我、制欲、不浄観、無相を 修して傲慢を退治して平安
転法輪経・十二因縁					
SN5-12-11 転法輪経	▲	離欲	㊦①五取蘊は 苦(四苦八苦)	カーマへの渴愛、 有愛、無有愛 無常観	八聖道により不再生 kāmatanḥā, bhavatānḥā, vibhavatanḥā. 「いかなるものでも集法は、全て消滅する存 在物である」という法眼が生じた
SN12 因縁 相応第20縁	▲		paccaya		十二因縁生一有一取一愛一受一受一触一 六処一名色一識一行一無明
SN 蘊品 1-5-5	○		Samanupassanāsut taṃ		無明が滅して明が生ずる avijjā pahiyati, vijjā uppajjati
般若心経・理趣経百字偈					
般若心経	○	空	①一切苦厄		五蘊を空と観て一切苦厄を渡る
理趣経	○	欲	㊦①衆生の苦		大欲得清浄、→大楽→衆生救済